

地震のあとで、焚火をおこす 村上春樹「アイロンのある風景」が映し出す ジャック・ロンドン「焚火」

田辺 章*

村上春樹の連作短編集『神の子どもたちはみな踊る』の六編は、すべて1995年2月 阪神・淡路大震災の翌月 を舞台としている。その第二話「アイロンのある風景」において、主人公たちが見つめる焚火の炎は、彼らにジャック・ロンドンの短編「焚火」を想起させる。主人公が「圧倒的なもの」と闘うことを諦め、死を選ぶ「焚火」の結末は、村上の短編の結末と響き合う。

「焚火」と呼ばれる短編は二つある。少年向けに書かれた1902年版と、それが大きく改変された1908年版。村上が「どうしてこの話の最後はこんなにも静かで美しいのだろうか？」と主人公に語らせた、「この話」が指すのは後者だろう。この物語が書き換えられたのは、1906年4月、作者ロンドンが地震の炎に焼かれるサンフランシスコを目撃した後なのだ。本論では、圧倒的なカストロフィの後に書かれたテキストとして、「アイロンのある風景」と「焚火」を考察する。

キーワード：村上春樹、ジャック・ロンドン、阪神・淡路大震災、
1906年サンフランシスコ地震、比較文学

序論

2000年に発表された村上春樹(1949-)の『神の子どもたちはみな踊る』は、1999年8月号から12月号にかけて『新潮』に連載された五編に、書き下ろし一編が加えられた連作短編集だ。連載当時の題は『地震のあとで』だった。この「地震」は、作者が育った兵庫県に甚大な被害をもたらした、1995年1月17日の大地震を指す。震災と火災による死者は6000人を超える。村上は、当時生活していたマサチューセッツ州ケンブリッジにおいて、炎に焼かれる神戸の映像を目撃した。この地震は、

* 人間科学総合研究所客員研究員・東洋大学経済学部非常勤

同年の3月20日、東京の地下鉄の複数路線に神経ガスが撒布された事件とともに、その後彼が書く物語に決して小さくない影響を与えることとなる。

地の震動で起きた自然災害と、地の深部で起こされた人為テロ。二つのカタストロフィを目にした村上は、「コミットメント」(commitment)という言葉を用い始める。1995年11月に行われた河合隼雄との対話において、これまでの自身の小説が、社会からの個人の「デタッチメント」(detachment)を強調するものであったことを指摘しつつ、今後は、個人がいかに外部とコミットしていくか、ということが重要な問題になるだろうことを彼は語っている。ここで村上が魅かれているのは、「あなたの言っていることはわかるわかる、じゃ、手をつなごう」(84)という直接的な他者との連帯ではなく、「『井戸』を掘って掘って掘っていくと、そこでまったくつながるはずのない壁を越えてつながる」(84)のような無意識を介した外部とのコミットメントだ。井戸や地下世界は以前から村上の小説に描かれてきたモチーフだが、1995年のカタストロフィにより、「アンダーグラウンド」(この言葉は彼がサリン事件の被害者たちを取材したノンフィクションの題となる)にあるもの、地下にあるもの、深部に潜むものは、彼が考えるコミットメントを媒介する要素として、より意識的に作中で用いられるようになる。

このようなコミットメントのあり方は『神の子どもたちはみな踊る』の設定とも無縁ではない。この連作短編集の六編は、すべて1995年2月、つまり阪神・淡路大震災が起きた1月と地下鉄サリン事件が起こされた3月の間の空白期間を舞台としているのだが、直接的に地震やテロの悲惨を物語化することは決して意図されていない。各短編の舞台は、釧路、鹿島灘、バンコック、新宿歌舞伎町といった場所に設定され、各作中人物(村上作品の特徴の一つであった一人称の語りは放棄され、多様な人物の物語が三人称で語られている)が、彼らが立つ地面の底、深い地下を通して、これらのカタストロフィと静かな心的接触を持つことが物語られている。大地震の余波と来たるべきテロリズムの予震で地面は微かに震え、地上に立つ彼らの心を静かに揺らす。

本論では、『神の子どもたちはみな踊る』の第二話「アイロンのある風景」に焦点を絞り、作中に引用されるジャック・ロンドン(Jack London, 1876 - 1916)の「焚火」(“To Build a Fire”)の主題との関連を考察したい。ロンドンによるこの短編小説が、村上の作品と作品外部をつなぐ「井戸」の出口として機能していると考えられるからだ。

1. 「アイロンのある風景」と地震

「アイロンのある風景」も他の五編と同様、現実世界に起こったカタストロフィの詳細を直接的に記すことはせず、神戸から離れた場所に生きる人たちの心の微かな震動を描き出している。舞台は茨城県鹿島灘の小さな町。所沢から家出てきた「順子」と、神戸に妻と二人の子供を残してきた「三宅さん」が中心的な作中人物である。物語後半の順子との会話において、三宅さんの家族が住むのは甚大な被害に襲われた東灘区であることが示される。その後二人は焚火を眺めながら、死について語

り合う。自分が「からっぽ」(64)で「ほんとに何も無い」(64)と訴える順子に対し、三宅さんが「この火が消えて真っ暗になったら、一緒に死のう」(63)と提案し、それに応じた順子が「束の間の、しかし深い眠り」(66)に落ちる場面で物語は終わる。

三宅さんは海岸の流木を集めて焚火を起こすことを、順子はその炎をそばで見つめることを常としている。順子のボーイフレンドの啓介は、出身や世代や職業、多くの点で異なる彼らの関係を「焚火フレンド」と呼ぶ。順子は三宅さんが起こす火を見て、「そこにある炎は、あらゆるものを黙々と受け入れ、呑みこみ、赦していくみたいに見えた。ほんとうの家族というものとはきっこうのものなのだろう」(49)と感じる。父母や妻子を捨ててきた二人もまた、焚火を通して、新たな、擬似的な家族関係を築いているかのようだ。

人が火を起こすこと、そして火を見つめることとともに、「アイロンのある風景」の物語は進行するのだが、この短編を読む上で見逃すことができないのは、ジャック・ロンドンと彼の短編「焚火」への言及が挿入されていることだ。順子は三宅さんが起こす火を見ながら、「いつものように」(44)ロンドンの「焚火」のことを思うほど、その短編を「何度も何度も」(45)読んでおり、一方、三宅さんはその作家がいかに死んだかを順子に語る。村上によるこの短いテキストには、ロンドンの生涯と彼の短編小説が巧妙に編み込まれているのだが、それはいかなる意味を持つのだろう。

村上にはロンドンの作品を好んで読んでいる。1990年5月21日の『朝日新聞』の「ジャック・ロンドンの入れ歯」という記事では、「ジャック・ロンドンと僕は誕生日が同じで、だからというわけでもないのだが、僕は彼の小説をよく読む」と記しており、アーヴィング・ストーン (Irving Stone) による伝記 (正確には伝記的小説というべきか)、『馬に乗った水夫』(Jack London, *Sailor on Horseback: A Biographical Novel*, 1938) を読者に勧めている。また、1988年に発表された長編『ダンス・ダンス・ダンス』には、(おそらくストーンによる)ロンドンの伝記を読んだ主人公が、「ジャック・ロンドンの波乱万丈の生涯に比べれば、僕の人生なんて樫の木のとっぺんのほらで胡桃を枕にうとうと春をまとっているリスみたいに平穩そのものに思」(48)う描写が見られる。

順子が高校時代から繰り返し読んでいたロンドンの「焚火」。一人で極北の地を歩く主人公が生死をかけて火を起こそうとする物語だが、彼女は、この男が真に求めているものは生ではなく死であると断言する。村上はこの短編の主題について、順子に以下のように語らせている。

この旅人はほんとうは死を求めている。それが自分にはふさわしい結末だと知っている。それにもかかわらず、彼は全力を尽して闘わなくてはならない。生き残ることを目的として、圧倒的なものを相手に闘わなくてはならないのだ。順子を深いところで揺さぶったのは、物語の中心にあるそのような根元的ともいえる矛盾性だった。(45)

一方、三宅さんはその作者の死について順子に語る。三宅さんによると、ロンドンは「ずっと長いあいだ、自分は最後に海で溺れて死ぬと考え」(61)つつ、モルヒネ中毒になり、「絶望を身体の芯ま

でしみこませて、もがきながら死んでいった」(62)人物である(ロンドンはずが四十歳で死んだが、モルヒネ中毒という自殺説を初めて明らかにしたのは前述の『馬に乗った水夫』だ)。三宅さんは冷蔵庫に閉じ込められて死ぬ夢を繰り返し見ていることを順子に告白する。「狭いところで、真っ暗な中で、ちょっとずつちょっとずつ死んでいく」(59)と彼は言うのだが、ある意味で予感通りに溺死したロンドンと同様、自分もまた予感通りの死に方をするのではないかと恐れている。

ロンドンの自殺と「焚火」における死の主題に導かれるかのように、三宅さんと順子は、二人で死を選ぶか否かという選択を行うこととなる。この短編で語られる死、そして死についての会話の間ずっと燃えている炎に、三宅さんの家族が住む神戸の映像を重ねることも可能だろう。また、三宅さんの夢の中に幾度も現れ、彼を闇に閉じ込め、窒息させ、殺してしまう冷蔵庫、その恐るべき四角い箱に、地震で倒壊した家屋や、神経ガスが撒布された地下鉄の車輛のイメージを重ねることも可能だろう。ここで重要なのは、物語における死のモチーフが、現実起こった、あるいは起こされたカラストロフィを想起させるものであり、その装置としてロンドンの「焚火」が物語中に埋め込まれていることだ。当初、火は「柔らかくてやさしい」、「人の心を温めるためにそこにある」(49)家族のような存在として語られていたにもかかわらず、ロンドンの生涯と彼の短編小説が言及されるにしたがい、それは死を招く業火のように燃え始める。

2. 二つの「焚火」と地震

「焚火」の主人公が死を求めていると考える順子は、「もしそうじゃないとしたら、どうしてこの話の最後はこんなにも静かで美しいのだろう」(45)と語っている。では、「焚火」の結末を確認する必要があるだろう。ロンドンの「焚火」と呼ばれる短編は二種類存在する。1902年版と1908年版だ。前者は*The Youth's Companion*誌1902年5月29日号に掲載されたものであり、少年向けに書かれた簡潔な物語だ。後者は*The Century Magazine*誌1908年8月号に掲載されたものであり、一般読者に向けて書かれている。1910年、短編集*Lost Face*に収められた。現在ロンドンの「焚火」といえば、後者を指すことが一般的であり、「アイロンのある風景」で順子が愛読する短編は、1908年版「焚火」を指すと断定してよいだろう。

1902年版と1908年版の主人公が置かれた状況に大きな差異はない。極寒の地を歩く男は火を起こさなければ死んでしまう、というものだ。しかし1908年版では文字数が大幅に足され、生死の境界がより詳細に描かれ、異なる結末が用意された。二つの「焚火」を含むアンソロジー*The Portable Jack London*を編集したアール・レイパー(Earle Labor)は、その序文において、これら二編を読み比べることはすなわち、優れた子供向けの物語と偉大な文学作品を区別することになると記している(xxix)。

1902年版「焚火」の結末は、順子が「静かで美しい」と語るものには程遠い。宗教的、教育的色彩が強い*The Youth's Companion*誌のために書かれた作品らしく、教訓的な物語が記されている。「決

して一人で旅をするな」(“Never travel alone.”)という極北の地における格言を繰り返し耳にしながらも、自分の身体に誇りを持つ屈強な若者が、伴侶を伴わずに旅をする。しかし厳しすぎる自然環境に圧倒され、生き残るために、凍てつき、麻痺した手を必死で起こした火で自ら焼く羽目に陥る。以下のように、この短編で語られる火は、人を優しく温める火ではなく、人の生と死を分かち極限の熱だ。

But the love of life was strong in him, and he sprang again to his feet. He was thinking quickly. What if the matches did burn his hands? Burned hands were better than dead hands. No hands at all were better than death. (61)

この主人公にとっての火は、死を拒み、生を得られる希望の対象であると同時に、自らを深く傷つけてしまう可能性を秘めた恐怖の対象でもある。彼は何とか生き延びるが、火に焼かれた手に残る傷跡を墓の中まで持っていくこととなる。そして「決して一人で旅をするな」という教訓をついに理解する、という結末だ。

1902年版から大きく書き換えられた1908年版「焚火」においても、極北の地を歩く主人公は、「一人で旅をするな」(“No man must travel alone.”)(143)あるいは「仲間と旅をせよ」(“A man should travel with a partner.”)(146)という古参の旅人の助言を思い出し、その正しさを理解するに至る。しかし、前者のように素朴な教訓とともに物語に幕が引かれることはない。教訓的要素は後退し、極限状態の描写が前面に押し出されている。1902年版との差異の一つに、命を救ってくれるであろう焚火を求め、旅人につきまとう犬の存在があるのだが、火を起こすことに失敗した男は、犬を殺してその体温で生き延びようという思いに駆られる。

この動物の存在は、旅人の極限的な精神状態をより鮮やかに描き出すことに貢献しているだけでなく、1902年版と大きく異なる結末を読者に知らせる役割を果たしている。1908年版の主人公は、暴力的なまでの自然環境に対抗しうる火を起こすことに失敗し、最後には死を受け入れ、安らかな眠りにつく。男の「死臭を嗅ぎ取った」(“caught the scent of death”)(150)犬が、新たな火の提供者を求め、彼が座っている場所から去って物語は終わる。

1902年版と1908年版のいずれにおいても、火が人の生と死を分かち記号であるのは同様であるが、前者では火と人は明確に別個のものとして語られている。一方、後者では火は人の命そのものであるという立場が取られているようだ。この極限状態においては、主人公が「注意深く、ぎこちなく扱う炎は命を意味し、消えて／死んではならない」(“He cherished the flame carefully and awkwardly. It meant life, and it must not perish.”)(146)ものだ。人が火を起こすことを諦めることは人が死を受け入れることを意味する。また、火を追い求める犬にとっては、人の命が存在する場所に火が存在するのであり、両者は分かちがたいものだ。

1908年版「焚火」を参照しているはずの「アイロンのある風景」における火は、ロンドンが描い

た極限の炎ではなく、「あらゆるものを黙々と受け入れ、呑みこみ、赦していく」優しさを持つものでありながら、ロンドンの「焚火」と同じく、それが消えることによって人の命が消えるかもしれないという結末を読者に提示している。少女が深い眠りにつく結末は、旅人が心地よい眠りにつく「焚火」の結末を参照したものであろう。順子は、「ほんとは死を求めている」にもかかわらず、「圧倒的なものを相手に闘わなくてはならない」旅人の姿を、自身に投影しているのだ。彼女がそれを相手に闘うべき、そして闘うのを止めたかのように見える「圧倒的なもの」とは、遠く離れた場所で起きた地震の後で静かに震動する「からっぽ」で「ほんとに何も無い」自らの存在である。

結論

村上が引用したロンドンの「焚火」は真に「圧倒的なもの」と闘う物語だ。極地における自然という「圧倒的なもの」と対面する主人公は、1902年版では闘い抜き、1908年版では闘うことを止め、死を受け入れる。後者が書かれる2年前の1906年4月18日、大地震がサンフランシスコを襲った。その死者は3000人以上とされる。ロンドン自らその地震を体験した。村上が1908年版「焚火」を「アイロンのある風景」の中に編み込んだのは、これらがともに「地震のあとで」書かれた物語、「圧倒的なもの」に襲われた後の世界で書かれた物語であるという認識があったからではないだろうか。

世界旅行を行うために帆船スナーク号 (Snark) を建造している中、ロンドンはこの巨大な震動に襲われた。当初はこの言葉に余るカタストロフィを言語化することを拒否していたにもかかわらず、船の建造費と地震で被害を受けた農園の家畜小屋の修復費を必要としていた彼は、*Collier's Weekly* 誌5月5日号に「目撃者の話」(“The Story of an Eye-Witness”) という記事を寄稿する。地の震動以上に火の拡大による被害が甚大であったことを冒頭で示したのち、火 (fire) や炎 (flames) に焼かれるサンフランシスコの風景を記述している。ロンドンがこの記事で記した、都市を破壊する火は、彼が小説において繰り返し描いた厳しすぎる自然の姿と重ねられる。この炎は膨大な数の身体を焼き尽くし、さらには焼かれて死んだ者の数値さえも焼き尽くしてしまうような、村上が言うところの「圧倒的なもの」として記されている。

An enumeration of the dead will never be made. All vestiges of them were destroyed by the flames. The number of the victims of the earthquake will never be known. South of Market Street, where the loss of life was particularly heavy, was the first to catch fire. (487)

また、ロンドンは、このテキストの終わりで、多くの建物が焼かれ、住む家を失った避難民のキャンプが並ぶ都市の風景を「火山の噴火口のようだ」(“San Francisco, at the present time, is like the crater of a volcano, around which are camped tens of thousands of refugees.”)(491) と記し、最後

まで火のイメージとともにこのカタストロフィを描写している。

ロンドンが1908年版「焚火」を書いたのは、この現実世界における暴力的な火を見た後だ。「焚火」における火は、彼が見た地震の火と異なり、「圧倒的なもの」に対抗しうる希望であり、火が人命そのものであるかのように語られている。しかしこの短編では、それと闘い、何とか生き延びる命を記した1902年版の結末は反復されることなく、火や命が圧倒されることを受け入れ、ついに消えてしまう結末が読者に示された。「地震のあとで」書かれたこの短編の結末に、作者が目撃した、厳しすぎる力に圧倒される人間たちの姿を重ね合わせることができるのではないか。

村上が「アイロンのある風景」というテキストに、このロンドンの短編を編み込んだことには、巧みな意図（あるいは、奇妙な偶然）が感じられる。これらはいずれも圧倒的なカタストロフィの後に書かれた物語なのだ。順子と三宅さんが見つめる焚火は、村上が言うところの「井戸」であり、ロンドンの短編「焚火」へ、そして、炎に焼かれる都市と人々のイメージへ読者を導く。さらに、「アイロンのある風景」を含む『神の子どもたちはみな踊る』は2002年に英訳され（題は*After the Quake*とされた。地震の後、との理解はいうまでもなく、人の心の震え、おののきの後、という意味にも理解できよう）前年9月の同時多発テロの後の合衆国において「圧倒的なもの」に襲われた後の世界において新たな読者を獲得している。「『井戸』を掘って掘って掘っていくと、そこでまったくつながるはずのない壁を越えてつながる」ような、物語のつながりをそこに見ることができる。震えの後に火を起こす、この村上の短編は、20世紀末の神戸の風景と20世紀初頭のサンフランシスコの風景を、そしてさらなる「圧倒的なもの」と出会ってしまった世界の風景を、今後も読者の心の中で静かにつないでいくことだろう。その炎に映るものは、生と死、希望と恐怖、救済と暴力、人間と自然…絶えず揺らめく。

参考文献

- 加藤典洋「地震と父なるものの影 『神の子どもたちはみな踊る』」『村上春樹 イエローページ Part2』荒地出版社, 2004, 103-140.
- 河合隼雄・村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』新潮社, 1999.
- 村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』(上)講談社, 1998.
- …「ジャック・ロンドンの入れ歯 唐突にやって来る個人的教訓」『朝日新聞』1990年5月21日夕刊7面
- …「アイロンのある風景」『神の子どもたちはみな踊る』新潮社, 2000, 39-66.
- …「解題『神の子どもたちはみな踊る』」『村上春樹全作品 1990～2000 短編集』講談社, 2003, 268-275.
- …「地震のあとで 震動をひっそりと分かち合うこともできる」『朝日新聞』2005年1月17日朝刊9面
- Fradkin, Philip L. *The Great Earthquake and Firestorms of 1906: How San Francisco Nearly Destroyed Itself*. Berkley and Los Angeles: U of California P, 2005.
- Hendricks, King, and Irving Shepard, ed. *Jack London Reports: War Correspondence, Sports Articles, and Miscellaneous Writings*. Garden City: Doubleday, 1970.
- Kingman, Russ. *A Pictorial Life of Jack London*. New York: Crown Publishers, 1979.

London, Jack. "To Build a Fire (1902)" *The Portable Jack London*. 56-62.

---. "To Build a Fire (1908)" *The Portable Jack London*. 136-150.

---. "The Story of an Eye-Witness." *The Portable Jack London*. 486-491.

---. *The Portable Jack London*. Ed. Earle Labor. London: Penguin Books, 1994.

Murakami, Haruki. *After the Quake*. Trans. Jay Rubin. New York: Vintage Books, 2002.

Stone, Irving. *Jack London, Sailor on Horseback: A Biographical Novel*. Garden City: Doubleday, 1938.

Haruki Murakami's "Landscape with Flatiron" as a Reflection of Jack London's "To Build a Fire"

TANABE Akira *

In Haruki Murakami's *After the Quake*, all the six short stories are set in February 1995, the month after the January earthquake in Kobe. In the second story "Landscape with Flatiron", the flames of a bonfire remind its central characters of Jack London's "To Build a Fire", the story about a traveler freezing to death at last.

"To Build a Fire" has two different versions. London radically rewrote the first version after he witnessed the San Francisco Earthquake in 1906. The aim of this paper is to study links between the stories written after the catastrophes, "Landscape with Flatiron" and "To Build a Fire".

Key words : Haruki Murakami, Jack London, Great Hanshin Earthquake, San Francisco Earthquake of 1906, comparative literature

* A part-time lecturer in the Faculty of Economics, and visiting member of the Institute of Human Sciences at Toyo University